

中国の新高等学校学習指導要領における外国語科に関して

楊 晶晶(大阪大学大学院)

1. 中国の学習指導要領における外国語科の変遷

学習指導要領は学校の教育課程を編成する際の基準であり、国の教育政策を反映するものと言える。

中華人民共和国成立以来、学習指導要領は何回も告示されたが、外国語科に関しては、1951年に発布された英語学習指導要領(《普通中学英語科课程标准草案》)が最初のものであった。その後、1956年に初めてのロシア語学習指導要領(《高级中学俄语教学大纲(草案)》)が発布され、1982年に初の日本語学習指導要領(《中学日语教学纲要》)が発布されたのである。

1986年に義務教育法が公布されてから、学習指導要領は中学と高等学校に分けて告示されるようになった。

21世紀に入ってから、2003年に告示された高等学校学習指導要領は十数年使用され続け、2018年になってようやく新しい高等学校学習指導要領が告示された。その後、全科目の「前言」の部分と思想政治、国語、歴史及び生物学において改訂された内容があり、2020年に全科目の改訂版が発布された。

2. 新高等学校学習指導要領における外国語科の変化①: 学科核心素養の提出

前回2003年版の外国語科学習指導要領と比べ、2020年改訂版に大きな変化が二つ見られた。一つ目は学科核心素養の提出である。

2003年版の外国語科に関して「総合言語運用能力」が強調されていたのに対し、2020年改訂版では「学科核心素養」が強調されるようになった。外国語科の学科核心素養は四つの側面があり、それぞれ言語能力、文化意識、思維品質と学習能力である。以下、日本語学習指導要領に従って説明してみたい。

言語能力とは具体的な場面において総合的に日本語を運用する能力のことである。生徒は日本語の授業を通じて、日本語のテキストやディスコースの意味、観点及び感情態度を理解し、中日両言語の異同に気づき、日本語で事実を述べたり、考え方や感情態度を表したりすることができる。

文化意識とは多様な文化に対して感じたり、認識したり、理解したりすることである。生徒は日本語の授業を通じて、日本やその他の国の文化的要素や特徴を発見できる。そして、中国は日本やその他の国の文化との異同を比べることで中華文化への理解とアイデンティティを深め、さらに相手に分かりやすい方法で中国のことを紹介できる。

思維品質とは論理性、思考力及び創造力など思考に関わる資質のことである。生徒は日本語の授業を通じて、分析や推理などの方法で自分の意見を整理・総括・論証し、日本語で問題を分析し解決することができる。

学習能力とは知識や学習資源を獲得し、学習活動を管理・調整する能力である。生徒は日本語の授業を通じて、学習に対する興味を保て、主体的な学習意識を高め、他人と協力することができる。そして、探求し続け、学習できる能力を有する。

3. 新高等学校学習指導要領における外国語科の変化②: 新規外国語種—独語・仏語・西語

今までの高等学校学習指導要領で定められた第一外国語は英語、日本語とロシア語であるのに対して、新指導要領ではドイツ語、フランス語とスペイン語も追加され、第一外国語と位置付けられるようになった。3言語に関して最初の国レベルの学習指導要領が作成され、内容的には高等学校向けのものはもちろん、中学校での開設や第二外国語としての設置も考慮される内容が盛り込まれている。

日本の高等学校学習指導要領で外国語に関する内容は、「第1款目標」の部分以外、主に英語について述べられており、その他の外国語が英語に準ずることになっている。これとは異なり、中国の外国語科指導要領は言語別で作成されている。つまり、2020年改訂版の外国語科指導要領は英語、日本語、ロシア語、ドイツ語、フランス語、スペイン語と全部で6冊からできている。6冊の構成は統一されており、「課程性質と基本理念」、「学科核心素養と課程目標」、「課程構成」、「課程内容」、「到達水準と評価」、「実施に関するアドバイス」、「付録」の7つの部分からなっている。